

幼児が自発的に活動するための援助のあり方
—遊びの場面をとらえて—

目 次

I	テーマ設定理由	1
II	研究仮説	1
III	研究内容	2
1.	自発的活動のとらえ	2
2.	幼児理解	3
(1)	自発的に活動する子の遊び	3
(2)	自発的活動の少ない子の遊び	7
(3)	自発的活動の少ない子の事例	7
3.	子供の発達と遊び	9
4.	教師の援助	10
(1)	活動の記録の取り方	10
(2)	教師の関わり方	13
(3)	自発的活動を促す環境造り	14
	・ 園内の環境図	15
	・ 園内保育マップ	17
5.	保育事例	19
1.	自発的に取り組む行事	19
(1)	誕生会	19
IV	研究成果と今後の課題	21
	参考文献	21

浦添市立宮城幼稚園教諭
比 嘉 悦 子

幼児が自発的に活動するための援助のあり方

—遊びの場面をとらえて—

浦添市立宮城幼稚園 比嘉悦子

I 設定理由

人間形成のうえで幼児期は極めて大切な時期である。この時期には、身体的な発達の基礎が出来あがり、また行動範囲の拡大に伴って情緒や社会といった人格形成の基礎が確立してだけでなく、好奇心や探求心といった知的な面も急速に発達していくと幼稚園教育要領にも示されている。

集団生活の場である幼稚園は、子どもにとって魅力あふれる楽しいところであり、そこには大好きな先生や友だちがいて、さらにやりたいことがいっぱいできる場所であってほしい。

毎日毎日幼稚園で、子どもたちはたくさんの友達や先生と一緒に活動し、そのなかで考え、感じ、笑い、話し、時には泣いたり悔しがったりしてすごしている。今日は〇〇ちゃんと△△して遊ぼうと、目的をもって、遊びに取り組む子がいる反面、次のような幼児の姿も見られる。

- ① 「先生、何かして遊ぼう」と、教師の所へくるが「何をしよう?」と教師がたずねると、だまっている子。
- ② 教師に指示されたことはするが、自分では遊びに入れない子。
- ③ 一見して、友だちと協力して遊んでいるように見えるが、友だちに従属的な子。
- ④ 家庭で、「あれもしたらダメ、危ないからダメ」と、自発的活動が抑制されている子などがみられる。

このような実情から、幼稚園生活の中でも自発的な活動が少ない子が増えているような感じをうける。そこで自発的に環境とかかわり、様々な体験をとうして、健康な心身の基礎、豊かな感情、人とかかわりをもつ力や積極的に物事に取り組む意欲・態度を身につけてほしいという教師の願いから、次のような手だてを考えてみた。

- ① 幼児自身が環境とかかわって遊びを展開、必要な体験が得られるような場所を作る。
- ② 幼児の内なる思いや願いを理解するため、一人ひとりの遊びを観察し、把握する。
- ③ 遊びの展開に応じた援助（時間、場、道具、素材、言葉かけ、幼児同士のコミュニケーションを図るなど）

上記の問題等を解決するための方法として①～③の手だてを研究したいと思い、本テーマを設定した。

II 研究仮説

園生活において、遊びの場面での行動や言葉をてがかりに、一人ひとりの発達の特性をとらえ、内面を理解し、言葉かけ、雰囲気作り、見守る、興味をもつような場作り、一緒に遊ぶなどの援助をすることによって、自発的な活動のできる子が育つであろう。

Ⅲ 研究内容

1 自発的活動のとらえ

(1) 自発的活動とは

- 自分から心や身体を働かせ、何事にもすすんで取り組む。
- 自分の世界というものを積極的に、作りあげていく。
- 自分なりに「こうしてみよう」「こうすると、どうなるのかな？」などと考えて遊ぶ。
- 自分の思うことを自由に表現し、他人に頼らないで遊ぶことができる。
- 困ったとき、先生や友だちに聞き、解決していこうとする。

『自発活動』

外部からの強制をうけずに、内部から生じた要求に従って開始される活動のこと。

自発活動は、発達といわれている活動と、精神的な要求から生ずる活動の二つが相互に関連しあいながら行われる。この自発活動を伸ばすためには、指導は一切行わない方がよいという考えかたもあるが、豊富な環境作りと子どもの欲求にもとずいた適切な援助を行うことによって、自発的活動を発展させることができる。すなわち子どもの好奇心や探求心を十分に伸ばし、知りたい、試してみたいという欲求を十分に満たす経験を多く与える。その中で、得られた満足感は、次の自発活動をうながすことにつながる。

——幼児の教育用語事典より引用——

(2) 自発から自主性へ

本来ならば、3歳までには、自発的に遊びをみだし、遊びに取り組むことが望ましいということもいわれている。この時本人一人だけの活動であってもいいし、相手（子供）があってもいいが大人から指示されないで、また、友達から指示されないで自発活動として遊びを開始し、充実感を体験すること、このことが自主性を育てることにもなっていく。

[参考例]

- 3歳児——〇〇しようと決める。〇〇しようとする。
Y男は、紙とハサミを持ち出し、いろいろな形を切り始めた。
- 4歳児——ほかの子供たちの活動に自分から参加する。
ままごとをしているところへM男がきて、「僕ね、となりのおじさん。A男ちゃんはお兄さんだよ、いいでしょ」と自分から役割を決めて遊びに加わる。
- 5歳児——身辺にあるものや人や事象に何かを感じ、何かに気づき、何かに見えて、
〇〇の活動が始まる。

道路で穴を掘っているおじさんの行動を見ていたB男、S男、翌日登園すると、「工事しにいこうぜ」といいながら砂場に行って穴を掘り道路工事を始めた。掘ったところに水を流したり丸太や空き缶を埋めて、橋のようにとられる道を作っている。などの年齢にあった自発性の発達がみられる。自発性が順調に発達しながら次第に自己統制の能力が発達することによって自主性の発達が実現される。よって、自発活動が幼児期にどれほどあったかということは、今後の成長に重要なことだと思う。

(3) 自発性を尺度とした分類

A 恣意的活動	{	1	すすんでやる
		2	なんとなくやる
		3	なげやりのやる
B はたらきかけを受けての活動	{	1	<u>すすんでする(したいから)</u> <u>その気になってする(したと思うようになって)</u> <u>納得してする(するべきだと思うようになって)</u>
		2	何も考えずにする 深く考えずにする
		3	いやいやする

自発的活動とは、Aの1とBの1に分類されたものをさす。

Aの1 幼児が何のはたらきかけも受けずに恣意的・積極的に行動すること。

Bの1 なんらかのはたらきかけを受けて、積極的・主体的に行動すること。

「すすんでする」— 教師の言葉かけやその他のはたらきかけはないが、設定された環境に促されて行動すること。

「その気になってする」— 教師や仲間の態度を含む環境に促されて行動する。

「納得してする」— 教師や仲間の積極的な言葉かけにより、するべきことの意義を理解して行動する。

2 幼児理解

活動は幼児が自ら環境に働きかけて生みだしていくものである。幼児が環境に働きかけていく力とか、環境を再構成していく力が重要な意味をもつようになる。そのような観点から、自発的に活動する子の遊びと自発的活動の少ない子の遊びを見てみる。

(1) 自発的に活動する子の遊び

何にでも興味をもち、活動に没頭し、そこで発見したことや気づいたこと、作ったものなどを教師や友だちに伝えて遊ぶ。

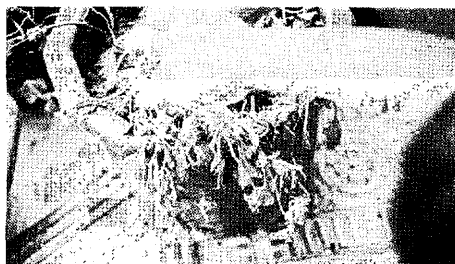
(例示) (1) 園庭で虫を発見——先生、虫がいるよ、何て名前かな？

・幼稚園に入園して三週目。幼稚園生活のリズムに慣れつつある4月下旬散水しながら虫を発見。

A「先生、変なケムシがいるよ。見て、見て」

B「何て名前かな」

先生「アッ、これトゲトゲクロムシだ。この虫ちょうちょうになる虫なんだよ」



C「へー、こんな虫がちょうちょうになるの」

トゲトゲクロムシが葉から落ちたので、教師が葉にのせた。それをみていたB

B「先生トゲトゲ、いたくないの？」

教師「痛くないよ。さわってごらん」

怖がってさわろうとしないが、教師が指に触れても、痛そうにしないのを見て、おそろおそろ手をのばして、さわりはじめた。

A「ほんとうだ、痛くない」

痛くないことがわかると、BとCもさわり始めた。

B「痛そうだけど、やわらかいね」

C「先生、いつちょうちょうになるの？」

教師「このかたちから、さなぎになってねむってからよ」

B「どのくらいねむるの？」

教師「そうだね、20日くらいねむってからかな」

話しの最中に、ツマグロヒョウモンチョウがとんできた。

教師「ほら、今とんでいるちょうちょうがいるでしょ、あのちょうちょうみたいになるんだよ。ちょうちょうになるまで、みてみようか」

観察ケースにパンジーの葉とツマグロヒョウモンチョウの幼虫を入れる。

教師「この虫の大好きなごはんは、このパンジーの葉だよ。この葉っぱしかたべないからね」

C「先生、僕は何でも食べれるよ」

B「ピーマンも食べれるよ」

教師「へー、すごいな。先生、子どもの時ピーマンきらいだったよ」

A「僕は、にんじんもトマトも食べれるよ」

話は、どんどん変わっていった。



子どもと教師のかかわり

〈子ども〉

〈教師〉

- 気づき、発見——発見の共有と共感
- 好奇心、探求心——相手になる、応答する、モデルとなる。

トゲトゲクロムシを発見したことで、友だちや教師との間に共有、共感する経験ができた。

子どものどんな小さな気づきや発見も教師が認め、受け止めてあげることによって、活動は展開していく。

② サラサラの土で遊ぶ

・女児5名の遊び ・園庭 ・時間9:10~10:05

<9:10> 園庭で砂のまま赤土を築め、サラサラの感触を楽しんだり、山を作ったりして遊んでいる。

教師「何を作っているの」

子ども「おもちゃ作っているの」

教師「おいしいおもちゃができたらいちばんいいね」

しばらく土をまませている。

<9:25>



誰ももなくバケツに水

をいれて運んできた。

水を少量ずつまぜ土が

どんだん変わっていくの

を楽しんでいる。



雨がふりだしてきただけ

教師が教室に入るように声

をかけたが、だれも動か

ない。かさやかっぱをづけ

てまで遊んでいる。

<9:35>



水・砂・土を適当に
まぜたかたまりを、
おもちゃとして、教師に
もってきた。



土をまるめていたのが、最初は土のサラサラの感触を
平たい円、(ケーキの形) 楽しんでいて、水をまぜて
になり、ショベルで切っ
ツルツルの感触を楽しんでい
たり、かためたりして遊
んでいる。



<9:45>

泥遊びをしているのを

見ていた子どもたちも

遊び始めた。



<10:05>

Yちゃん

友だちが遊んでいるのを見て、遊びはじめたが最

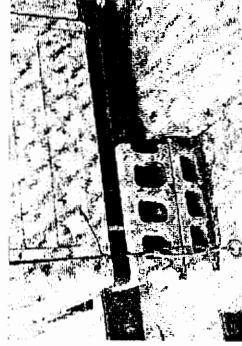
後まで一人で、「ハンバーグ」や「おにぎり」「ま

んじゅう」を作り、倉庫の下のブロックに隠して

いた。

自分で作った満足いくぐんごだったので、こわ

されないように大切に隠している。



『サラサラの土で遊ぶ』の背景

- ① 素材からの働きかけがある。
 - ・土と水は、変化をもたせて遊ぶことができる。
 - ・幼児のイメージを豊かにすると思われる。
 - ② 自由にかかわることのできる場や雰囲気がある。

幼児が、自分の思いを表現できるように、材料、場所、時間が整い、それぞれのかかわり方を受けとめたりする環境や雰囲気があったことが、自由な発想や多様なかかわりを楽しむ姿につながったと思われる。
 - ③ イメージを広げたり、作ったもので遊べる環境がある。
 - ④ 共感し合う教師や友達がいる。

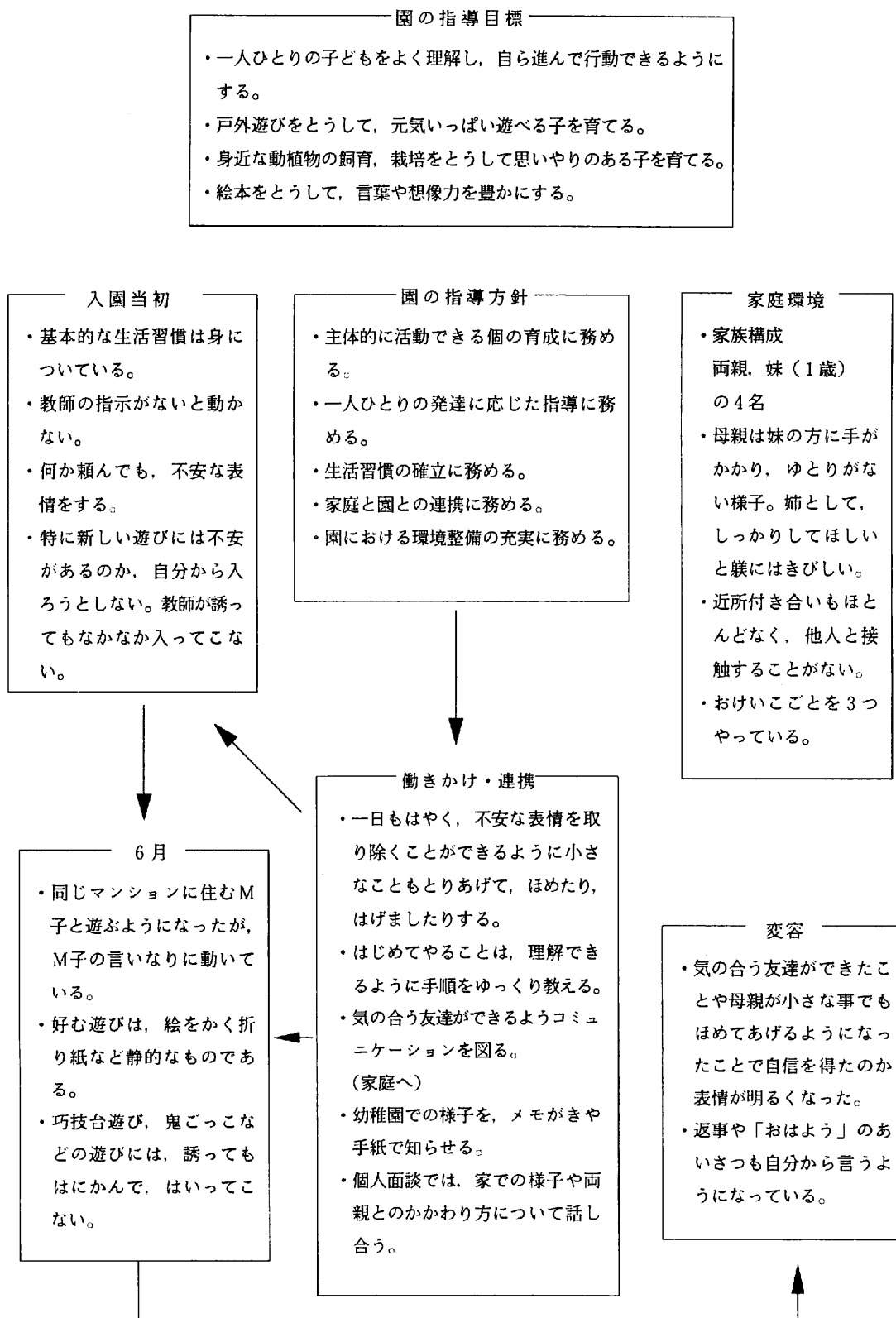
素朴で自由な幼児の発想に、教師や友達が心を動かし共感したことが、自分の思いを表現する喜びや満足感につながっていったと思われる。

幼児は土、水で遊ぶことによって、自分の思いをさまざまに表現していたと思われる。この時期には、その子なりのかかわりを十分に楽しめるようにし、多様なかかわりを体験できるようにすることが、幼児の表現の幅を広げることにつながるといえることがわかった。

幼児の心を動かす素材の提示や、その素材とのかかわりの中で楽しさが味わえるような教師の援助について考えていきたい。
- (2) 自発的活動の少ない子の遊び
- ① 友だちと一緒に遊んでいるようにみえるが、自分から遊びを展開しないで、友達に従属的である。ごっこ遊びなど共同で遊ぶ場で友達と遊びながら自分の考えを発展させていくことが見られない。
 - ② 性格的にはおとなしいことも考えられるが、身近な大人から動的な遊びは危険だからダメと抑制されてきたために、遊びの経験が乏しい。

一定の場所がかぎられた遊びをする。特に室内での遊びが多く見られる。ひとりで遊ぶことができる遊びとして、絵本をみる、粘土遊び、絵をかく、ブロック遊びなどが多く見られる。遊びがパターン化していることが多い。
- (3) 自発的活動の少ない子の事例
- 入園して2カ月経過したころ、大部分の子が気の合う友達をみつけて遊びをすすめたり、自分の好きな遊びをみつけて遊ぶことができるようになる。そのような中で基本的な生活習慣はほぼ確立しているが、何をして遊ぼうか自分で遊びをみつけられずボーッとたっていることが多いY子。友達と遊んでいることもあるが、よく見てみると友達の意見に従って行動していることが多い。気になる子のひとりとしてY子の様子を見てみる。

〈自発的活動の少ないY子の事例〉



3 子どもの発達と遊び

子どもは遊びの中で何を発達させるか

子どもの遊びが大人の遊びと異なる点は、子どもは遊びそのものが目的であり、余暇として、労働力の再生産のために遊んだりしない。遊びの中で子どもは発達するともいえる。子どもの遊びは総合的な活動なので、遊びの中で各種の能力が発達していく。

〈社会性の発達〉

子どもは友だちと遊ぶことによって、友だちとの付き合い方、ルールや約束ごとを守る態度、個人の役割や責任を学び、他人の立場を理解することを知っていく。

〈自立の発達〉

幼児は大人、特に親への依存性が強い時であるが、遊びは親子分離のきっかけとなる。特に友だちとの遊びの中では、相手に依存しては遊びが発達しないし、対等に競争したり共同することもできない。

〈知的能力の発達〉

遊びをとうして、幼児は工夫する力、創造する力を養う。また、遊びは自発的な活動なので、自由に想像力や好奇心をひろげ、いろいろな体験をとうして知的能力の土台を養う。

〈運動力の発達〉

遊びの中では、自然に足や腕を使い、知らず知らずのうちに、各種の運動能力を発揮させる。また、外遊びでは自然に触れ、日光を浴びて身体を動かすので、心身の健康を増進する。

〈情緒の発達〉

遊びに夢中になっている子どもの顔は、生き生きと輝いている。遊びは子どもの情緒を安定させる。また、自由な遊びの中で、自己表現することにより、欲求不満を解消させたり、自己充実を味わうことができる。友だちと一緒に喜びや怒りを共感し合うことも豊かな情緒を発達させるのに役立つ。

このように遊びは、子どもの多面的な能力を総合的に発達させる。子どもはいろいろな能力が発達してくると、それを使ってあそびを始めるが、遊ぶことによってさらにいろいろな能力が発達するのである。

4 教師の援助

子どもの気持ちを受容することによって、教師との間に親密な関係を作ること前提として、①子どもの発達に沿って②個々の子どもの活動を把握することに努めながら③子ども一人ひとりの自発活動を促し④個の充実活動を図りながら⑤集団生活にまで高めていくこととして記録の取り方を考えてみた。

(1) 個々の子どもの活動を把握するための記録のとり方

① ボード記録

一枚のボードの上に、全員の名札をおきその日の主な活動をかく記録

毎日の保育終了後、教師全員がボードをかこんで集まり、活動の情報をだして記録図を作る。その過程で、一人ひとりの子どもが活動をどのように楽しんでたか、または楽しんでいなかったのか、遊びの内容などからの情報の交換をする。活動が充実していないと思われる子どもの姿をとりだして、変化がみられたか、どんな援助が考えられるかなどを、具体的に話し合う。継続的な記録として、教師の援助を促してくれる。記載では、子どもの多様な活動の中から、何をその日のその子の主な活動として選択するかが問題になる。一応の目安として、時間的に長く取り組んだ活動、集中度の高かった活動、教師からみて充実し楽しそうだった活動を選ぶ基準としている。できるだけ全園児に目をむけるという姿勢ではあるが、一日に記録をとることができる人数には限界がある。そこで「今日は〇〇と△△を特に見てみよう」と、めぼしい子や、前日、あるいは登園時の状態からみて気にかかる子、また今日は10名にしぼってみようなどと人数を限定することもある。

〈6月初旬の記録より〉

6月にはいり、子どもたちは好きな遊びを見つけ、気の合う友達との関わりの中で、幼稚園生活を楽しんでいるように見えるが、子どもたちの様子をみていると、遊びへの取り組みがみられない、友だちとの関わりが少ない、いつも教師にまわりついていてなどの“気になる子”がいる。日々の話し合いで自発活動が少ないと思われる子11名について、全職員で共通理解し、援助していくようにする。

氏名	様子	援助
1. A・N子	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの後ろからついて歩き、友だちの遊ぶ様子を見ている。自分からは遊びに参加しない。常に指しゃぶりをしている。 ・人のやっていることや言っていることは、よく聞いている。教師の質問に対しては、明確に答える。 ・教師が遊びに誘うとついてくるが、友達や教師の遊んでいるのを傍観している事が多い。教師が次の遊びへうつると、同じ場所に立ち指をしゃぶっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が遊びに誘い、一緒に遊ぶ中で、適宜友達に「A・N子」の存在を知らせるよう声かけをしていく。

氏 名	様 子	援 助
2. N・Y子	<ul style="list-style-type: none"> 口数が少ない。表情が暗い。 砂場に立っていることが多いが遊ばない。 	<ul style="list-style-type: none"> 砂遊びに興味をもっているようなので、砂場の近くに、ままごとができるような場を設定して遊びに誘う。
3. F・A子	<ul style="list-style-type: none"> ひとり遊びが多い。 友達とのかかわりをあまりもとうとしない。 	<ul style="list-style-type: none"> 経験が少ない、友達とのつながりがもてないことの原因として欠席が多いことが考えられる。できるだけ欠席をさせないよう親にはたらきかける。
4. K・A男	<ul style="list-style-type: none"> 常にひとりでも遊ぶことができる。 友達との関わり方がわからないためトラブルがよく生じる。 家での遊びはファミコンゲームやおもちゃで遊ぶことが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 多様な動きの遊びに誘い、動く楽しさ、友達と遊ぶ楽しさを知らせて行く。
5. U・Y男	<ul style="list-style-type: none"> 転入して一ヵ月になるが、病弱で欠席が多いため友達と関わりあう遊びの経験が少ない。 絵本をみたり、他の子の遊ぶのをみている。 	<ul style="list-style-type: none"> 無理のないように、いろいろな動きの遊びをしらせる。
6. U・N子	<ul style="list-style-type: none"> 欠席が多い。 大人にべったりで、友達とうまく遊べない。 	<ul style="list-style-type: none"> しばらく経過観察する。
7. H・M子	<ul style="list-style-type: none"> 友達関係がうまくとれない。 親とのスキンシップが十分ではないようである。 	<ul style="list-style-type: none"> しばらく経過観察する。
8. S・S子	<ul style="list-style-type: none"> 内向的な性格で、友達や教師に誘われたら遊ぶが、進んでは遊ばない。 	<ul style="list-style-type: none"> できるだけ一人にならないように、遊びに誘い、一緒に遊ぶ。

氏名	様子	援助
9. Y・H男	<ul style="list-style-type: none"> ・かんしゃくもちである。乱暴な面があり友達ができない。 ・チャボの世話は責任をもってやる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Y・H男の目立たないが頑張っていることを、みんなに知らせ受け入れられるようにする。 ・ある程度、我慢をするなど気持ちをコントロールできるように導く。
10. H・A子	<ul style="list-style-type: none"> ・友達に興味をもっているが、うまくつき合うことができない。 ・気をひくために、ちょっかいをだすので友達にいやがられる。 ・汚れた所をみると、徹してそうじをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えだけでなく、相手の気持ちを考えることも大切であることを個人、全体の場で知らせていく。
11. S・S子	<ul style="list-style-type: none"> ・常時指しゃぶりをしている。入園当初は友達と遊んでいたが、この頃は教師の周りにいることがおおい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような気持ちの変化があるのか理解し、安定するまで教師の側において見守る。

② 個人記録

活動の様子や教師の関わりや考察が記録される。

記録の少ない子どものことが反省となったり、充実できない子どもについて、どのように援助するかを考える。

◆ 一日の様子の記録

〈幼児の一日の様子〉 6月7日

氏名	幼児の様子	氏名	幼児の様子
N	ドッチボールに参加。はりきってやっている。ボールを受けたり投げたり全身をよく動かしている。表情が柔らかくなった。	A	うんていやドッチボールに関わる子が多くなってきた中で、何をしてもなく過ごしている。うんていの下にマットを敷いてくれた。

- ◆ 一週間の活動の様子をまとめて、次週へとつなげていく。

〈今週の様子〉

氏名	今週の様子	次週への展望
N	おとなしかったNがドッチボールをやるようになって、生き生きと行動するようになった。自分の考えたことをいうようになってきている。	ドッチボールを楽しむなかで、友達との関わりも広くなることを期待する。
A	興味をもっていても素直に遊びに入ろうとせず傍観的である。	友達に自分の考えを伝えながら、相手のことも考えられるような遊びの経験を多くさせたい。

(2) 教師の関わり方

基本的な姿勢

- ① 子どもの育った環境や、子どもを取り巻く環境は一人ひとり異なり、その表し方も違うので、心身の望ましい成長発達を図るためには、一人ひとりの成長の歩みをしっかり見ながら愛情をかけていくことがたいせつである。
- ② 保育をすすめるなかで、教師に望まれることは、主役はいつも子どもであり、子どもの側にたつてものをみたり、子どもと一緒に考えたりする。
- ③ 一人ひとりの子どもの内面を理解するために、子どもと一緒に遊ぶことによって、「この子どもはなにをしたいのか」「どのようにしたいのか」を、表情や言葉や動作から考え「なぜあんなことをしているのか、どのような原因や背景があるのか」という疑問をもつ。教師の子どもに対する援助行動は、子どもを理解する手だてにもなる。

遊びの場面での教師の援助

一人ひとりの子どもにふさわしい生活を実現するためには、共有者、共感者としての教師の働きがある。

- ① 内発的動機への刺激
- ② 幼児自身の発想を転換し広げるための刺激・素材
- ③ 自己課題や目的、イメージを引き出し明確化するための援助
- ④ 集中化や意気の高揚にむけての雰囲気作りなどもふくめた状況作り
- ⑤ モデルとなる
- ⑥ コミュニケーションをスムーズにする役割、協力体制、共同意識を盛り上げる援助
- ⑦ 筋立て、関連づけへの援助
- ⑧ 相手になる、応答する、役割問題の発見者となる
- ⑨ 認め、励まし、揺さぶるなどをさらによくする
- ⑩ 発見の共有と共感

(3) 自発的活動を促す環境作り

子どもが心を動かされるような状況作り

「環境の応答性」——「子どもの活発な活動」——「成功感や自信」——「新しい活動への発展」といった経路がみられる。

応答的な環境を作り出すためには

- ① 子どもに手ごたえ（効力感）を感じさせるような遊具が準備されていること。
- ② こどもの周りにいる大人や友だちが応答的であること。
- ③ こどもが自由にいじったり、動き回ることでできる空間があること。
- ④ 子どもに理解できる目標、または結果がえられること。

発達を促す教育的環境とは、子どもの現在の発達よりも少し先の条件が環境の中に準備されていることである。これは子どもにとっては、新しい課題をもった場面である。そのような考えにより、子どもの活動の場として「園の環境図」「地域の環境図」を作成した。

「園の環境図」——子どもたちの活動する場として、子どもたちの活動している姿がとらえられるように環境の工夫や援助を考える。（図1）

「地域の環境図」——子どもたちの生活圏として園外へも目をむける。（図2）

- ① 近くの公園——
 - ・子どもたちの家の近くの公園を活動の場として広げて行く。
 - ・知っている公園ということで、安定して遊ぶことができる。
 - ・公園に遊びにいくと、教師の周りに残る子や何をしていたかわからないと言う子がいない。自分のやりたい遊びをめざとくみつけ、遊びにとりかかる。「先生、かけっこしよう」とか「先生、あそこに〇〇があるよ」など、自発的に活動する様子がみられるので、経験を広げる場として地域の公園を活用する。
- ② 近隣の幼稚園との交流——より多くの人と触れ合うことにより、友だちの輪を広げる。自分の園とは異なる遊具や場で経験を広げることができる。
- ③ 地域の施設や自然——身近にあるが、まだ行ったことがない場所もあるので、みんな探索しながら、地域を知ることができる。

園内（校内）の環境図 (図11)

幼児が自発的に環境とかわかっていることにより生まれる活動と援助



活動内容
教師の援助

固定遊具
・うんてい、鉄棒、タイヤとび、旋回コースターなど新たな動きへの挑戦の場である。
・ブランコのりでは、いろいろなひり方を考え試している。
・ひとりりで独占しない、友達と交代するなど、話し合っている。
・旋回コースター
・新しい遊具で子供達の興味をひいている
・常時関わっている
・自分たちのイメージで遊びをすすめる
「ターボレンジャーごっこ」
「忍者ターゲットごっこ」

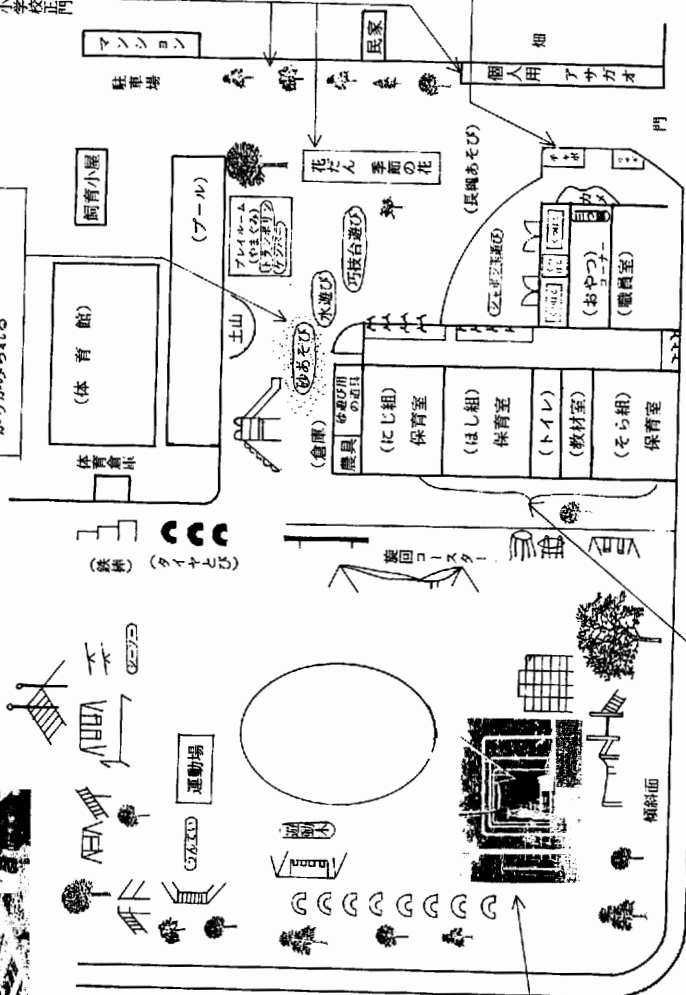
・安全に配慮しながら、ひとりひとりが興味のあるものに思う存分かわかっていることができるようにしていく
・新しい遊び、おもしろい遊びを認めていく

運動場
思いきり身体を動かして遊ぶ
・小学校の体育の授業のない時をみはからってボール遊びやかけっこ、おにごっこをして遊ぶ

幼児の遊びの様子を見ながら教師もその仲間に入り、遊びの楽しさを知らせ、広げていく

砂場で
砂・水の感触を楽しむ場
・友達や先生といろいろな遊びを発見し、イメージを豊かにする
・水と砂の感触を楽しむ、解放的な気分できるとりくむ
・友達との輪の広がり、遊び方の広がりがみられる

イメージしたものに必要素材の提供、言葉かけ友達とのつながりを援助する



・花・木・草の周辺
・虫などを発見し、探求を楽しむ
・個人用の鉢植えのアサガオや花だんの花に毎朝、水をやりながら様子を見て、植物の成長に関心をもつ

幼児の発見や気づきに耳を傾けながら、身近かな自然に働きかけられる楽しさを知らせる

小動物の世話
・えさや水をあげたりしながらカメラ、リス、ウサギ、チャボの様子を観察している

世話をしながら小動物の取り扱い方を気づかせる

・好きなもので自由に遊べるように材料を用意する
・遊びの状況によってはひと思いのたたり、気分転換する場になるので、落ちついた雰囲気になるような場にする

水遊び・シャボン玉遊び
季節感のある遊び
・身近かな存在の水で遊ぶことにより気持ちの発散をする
・不思議だな、どうしてかな? こんなふうにしてもできるかと試して遊ぶ

保育室
好きなもので安心して遊ぶ場
・絵本を読んだり、絵をかいたり粘土遊び、折り紙を楽しむ

・幼児と一緒に遊びながら楽しく遊ぶことができるように気づかせる、考えなどのたらしめかけをする
・水、シャボンについては安全に気をつけて遊ぶことができるようにする。



国外保育マップ

<交流ができる場>

- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

<買い物ができる場>

- ・おやつやの買い物ができる買う所
- ⑧ ⑨ ⑩
- ・飼育動物のえさを買
- ⑪

<季節を感じる自然の場>

- ・セミとり、草花で遊ぶ
- ⑫ ⑬ ⑭ ⑮

<いろいろな動きが楽しめる場>

- ・楽しい遊具がある所
- ⑯ ⑰ ⑱

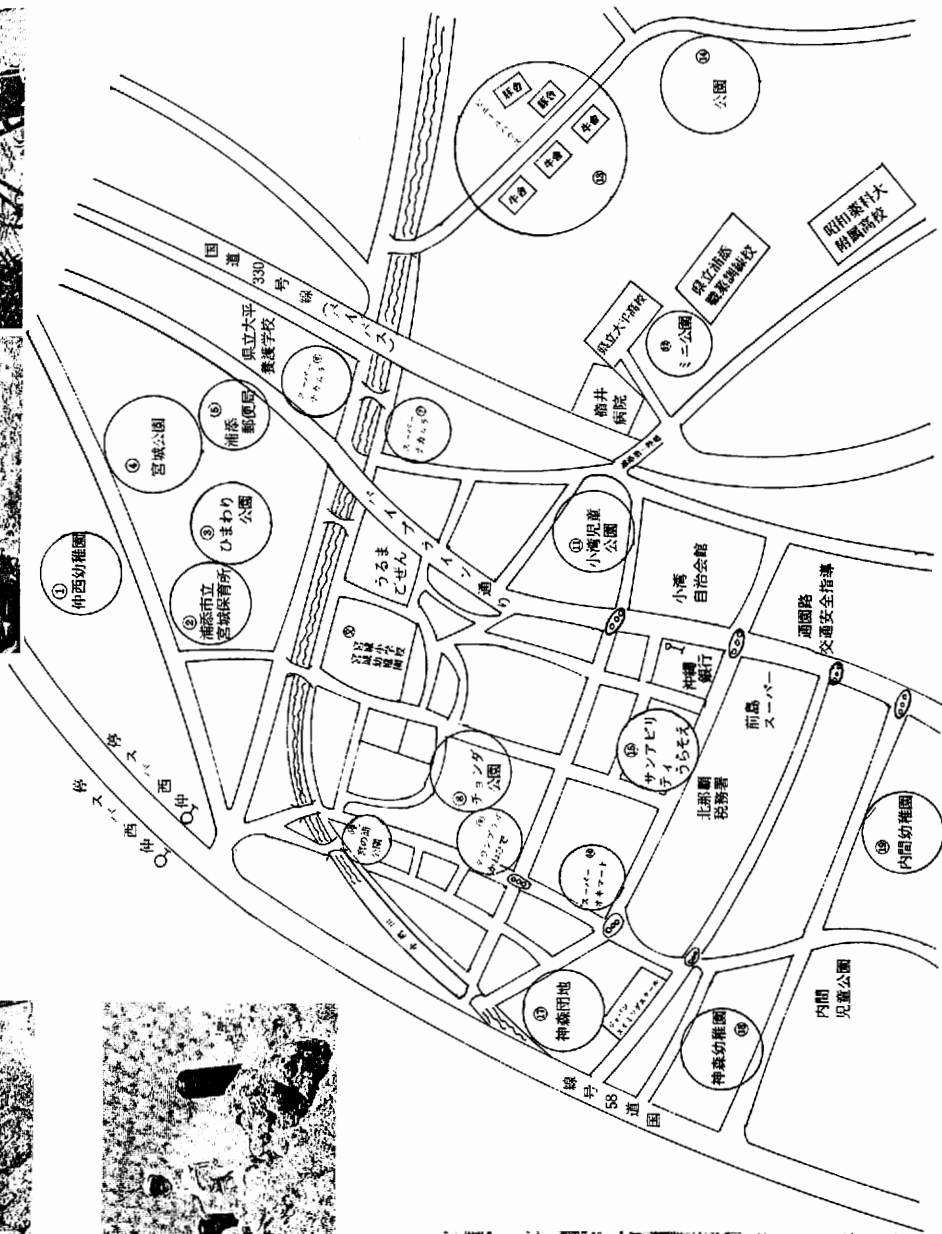
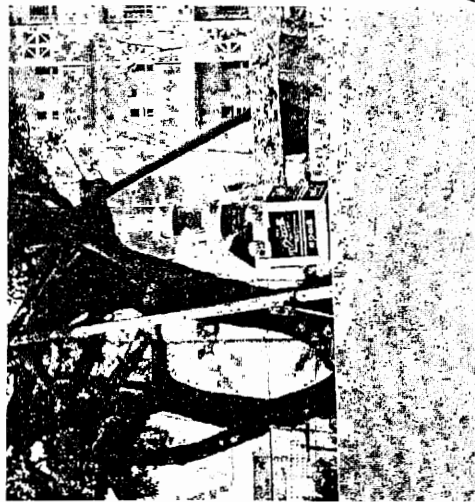
・走る、転がる、ゲームができる所

- ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓

<社会経験を広げる場>

- ㉔ ㉕

※交通安全指導の場



5 保育事例

1 自発的に取り組む行事

行事は、子ども一人ひとりの生活にどう位置づけられるべきか、そこを子どもと共に考え、子ども自身の生活が、より豊かに展開されていくためのものとして考える。そのためにも、日常の保育、子どもたちの生活が、子どもたちの楽しみや喜び、あるいは共に共感しあえる活動であることを基本とする。

子どもたちの生活の中から生まれた『子ども同士がつくる行事』として、誕生会、カレーライスパーティ、みそ汁パーティなどがある。このような子ども自身が生活からつくりだした行事が運動会、生活発表会、遠足など大きく取り組む行事になった時、「子ども自身」から「子どものために」になる。そこには、子ども自身が求める楽しみとは、ほど遠い行事になる。「子どものために」が子ども自身を「人間として」の育ちにつなげるのではなく、教師のなすがままに子どもを育てる『受け身人間』を生み出すことにもならないだろうか。

成長の節目としての園の行事であるなら、「人間として」の意味を、子どもの発達とのかかわりからとらえ、子ども自身の育ちを支え、援助しながら、共に考える姿勢をもち続けることが大切である。

子ども自身がお互いに意欲をかき立て、協力しあいながら作りあげていく喜びを感じる行事として、「誕生会」の取り組み組みを考えてみる。

事例(1)誕生会

子どもたちは『大きくなる』ことにあこがれを抱き、『誕生日をむかえた』『5歳から6歳になった』ことに大きな喜びを感じている。家族で成長を祝う誕生日とは違って、クラス全員あるいは幼稚園の全員がお祝いしてくれることは、自分も仲間の一人であることを自覚するきっかけにもなる。

そしてまた、「おめでとう」とお祝いすることは、楽しいこと、嬉しいことなんだと感じとることにもなり、みんなから祝ってもらうことで誕生児自身が大きくなったんだと意識し、精神面でも自覚をもち、今後の生活が、より自信をもつきっかけにもなる。

(ねらい)

- ・誕生会は、みんなで祝う楽しい会であることがわかる。
- ・プレゼント作りをしていく中で、みんなと一緒に作る経験をする。

活動の展開（一学期）

○ 自発的にプレゼント作りに取り組む姿

『友だちの誕生日のプレゼントをみんなで作ろう』

- ・園だよりに書かれたその月の誕生児の名前を、みんなの前でよみあげて紹介する。
- ・誕生児へのプレゼントを作ることを、みんなになげかける。
- ・『みんなで作る』という気持ちを大切にしながら、教師も共にプレゼント作りをする。
- ・子どもたちの得意としているものを認める。
例えば、折り紙や切り紙をつけた冠、ネックレスなど。
- ・誕生会の1～2週間前から、自由な活動の時に作る。

- ・教師は、子どもと共に場作りをする。製作するコーナーとして机やイスを用意し、必要な材料（色紙、画用紙など）を準備する。
- 誕生会当日
 - ・月の終わりごろに、全園児保育室（時には園庭で）に集まっておこなう。
 - ・誕生児は廊下に並んで、名前を呼ばれたら「誕生日」の曲に合わせて入場する。
 - ・司会になった教師が、誕生児にインタビューをする。
「名前」「年齢」「好きな食べ物」「好きなテレビ番組」などを聞く。
 - ・祝う側にも、「誕生児に聞きたいこと」として、発言する時間をもうける。
- 歌のプレゼント
 - みんなが知っている歌の中から1曲～2曲プレゼントする。
- 教師からのプレゼント
 - ・人形劇、劇、ペープサート、手品、ダンスなどのだしもの
 - ・誕生カードのプレゼント
誕生児一人ひとりに、お祝の言葉や写真入りのカードをプレゼントする。
- みんなで作ったプレゼントや園からのプレゼント
 - 誕生児がプレゼントを渡してほしい友だちを指名する。指名された子は、みんなの代表としてプレゼントを渡す。
- 援助のポイント
 - ・誕生会は、子どもたちにとって嬉しい体験のひとつなので、「大きくなった」ということを具体的な話を、例に引いたりして、子どもなりにわからせていくようにする。
 - ・誕生プレゼントは、今までにつくってきたものや、経験を生かせるように配慮し、できあがったものを認める。
 - ・誕生会は毎月行うが、子どもにとっては年一回のことなので、会としてはいつも新鮮なものとなるように心がける。
 - ・誕生カードは教師の手作りで、誕生児の日頃の姿や特性をとりあげ、みんなが誕生児を認めるきっかけになるように配慮する。
- 子どもと一緒に計画する誕生会（2,3学期）
 - 発達の違いをとらえながら、子どもたちが今何をしたらよいのか、何をするのかを教師も仲間の一人として考えていく。
 - ・先行経験を生かしながら子どもが自発的に活動するよう、一人ひとりの考えや発想を重点に自分たちの会となるよう方向づけをしていく。
 - ・日頃の生活の中で知った踊りや歌、得意なこと（空手、なわとび、竹馬、とびばこなど）を発表する場としていく。会の進行も自分たちですすめていけるように意識づけていく。
 - ・教師の出し物としての劇やダンスが、時には子どもたちの共感をよび、そのあとの子どもたちの活動に再現されることもあり、子どもと子ども、教師と子どものつながりが深まり、自発的に活動する子どもを育てる要素となる。

子どもたち一人ひとりの気持ちに育ってほしいものとして、『生きていく実感と共に、命の尊さ』をも知る大切な行事の一つであると考えてる。

IV まとめと今後の課題

1 まとめ

- (1) 援助には受け入れる、見守る、ほめる、励ます、助言する、手伝う、教える、雰囲気作り、子ども同士のコミュニケーションを図るなど数多く考えられるが、第一にはありのままの姿を受け入れるということが大事だと思う。「受け入れられた」「認められた」ということで子どもは心を解放し、自発的に活動し始めるので、その後は一人ひとりに応じた援助をしていくと自発活動は更に増していくことがわかった。
- (2) 全職員で全園児を育てるということを前提として、保育終了後子どもの活動について、ミーティングをしてきた。そのことは、共通理解がもてると同時に一人の教師の考えで援助するのではなく、いろいろな援助が考えられるということによかった。

2 今後の課題

- (1) 自発性が育っているかどうかは、短期間でみえることではないので、援助をしながらその子の育ちを追跡調査してみたい。
- (2) 一人ひとりが喜んで関わりたくなるような環境を用意し、子ども自身が自ら選んで活動に取り組もうとする状況を作る。
- (3) 自発活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であるので、力強く生きることの糧となるような、原体験の場を数多く設ける。

3 おわりに

アッという間にすぎた四カ月。はじめて経験することが数多くあり驚いたり、意気消沈することもありました。でも幸い素晴らしいスタッフに恵まれ、なんとか研究をすすめることができました。いつも研究員を見守って下さった前田所長、諸見里係長、どんなお願い事も心よく引き受けてくださった事務の皆様、御指導いただいた宮城久子主事、並びに各指導主事、いつも励ましの言葉をかけてくださった宮城幼稚園の比嘉園長、職員の皆様そして市内の幼稚園の先生方に深く感謝申し上げます。

参考・引用文献

幼稚園教育指導書	文部省	フレーベル館
遊びを広げ深める保育	愛知幼児教育研究会	中央法規出版
幼稚園教育要領の解説と実践	高杉自子 編著 平井信儀 森上史郎	小学館
幼児の教育用語事典	平井信儀 編著	教育出版
保育の心	平井信儀 共著	建帛社
子どもがつくる	渡辺 明	フレーベル館
幼稚園教育要領の展開	岸井 勇 編著	明治図書